

自己感覚の発達における描くことのはたらき

森 岡 理恵子

How 'Drawing' Contribute to the Development of Sense of Self

MORIOKO Rieko

遊戯療法は遊びを通して子どもの自己実現を図る心理療法の一技法である。子どもは遊ぶことによって内的な欲求を表出するのみならず、遊ぶことによって症状や存在の意味に触れ、それを照らし返すものと理解している。この仕事を始めて日も浅いが、筆者は心理面接の過程で遊ぶことによって子どもが癒されることに目を見張ってきた。日常的な子どもの遊びにおいても子どもたちが自分の在り方を探っているように見える。そしてそれは‘自分’とでもいうものの発達にかかわる営みではないかと思われる。

特に本稿では遊ぶことの中でも‘描くこと’に注目したいと思う。子どもたちは一見拙いようではあるが、何やら意味深げな物を描いていることが多い。描きながら話が展開し対話しているように見える。臨床の場面でも描くことが自己像を探る過程を促す。本稿は描くことが子どもの自分という感覚を育てることにどのように寄与するのか考察するものである。

‘自分’を知る、あるいは‘自分’という感覚をもつということについて本稿では仮に‘自己感覚’と記述する。これは「自己意識」などのように意識や自覚をとまなうものではない。他人とは違う明確な輪郭をもっている感覚、行動や感情の主体であるという感覚などの乳幼児の最早期からある‘自分’という実感について述べたいと思う。これは Stern, D. (1985) の「自己感 (sense of self)」という概念に近いものであると思われるが、「自己感」は現在定着している感があり本稿で用いる場合十分な吟味が必要かと思われる。今回は自己感と区別するために敢えて‘自己感覚’と記述する。

1. 自己感覚の育ちにおける遊ぶことのはたらき

1) 体験の中間領域

描くことに先立ち、子どもが遊ぶことが‘自分’という感覚を育てる上でどのような意味をもつか概観してみたいと思う。

Winnicott 1971 a は心理療法や子どもの育ちにおける遊ぶこと (playing) の重要性に注目した。彼によれば人は本能的身体的な基盤をもつ私的心的な内的現実と、個人の外にあり他人と客観的に共有することのできる外的現実との二つの現実を生きている。幼児の遊ぶことについて考えるときに、彼は内的現実と外的現実との間に横たわる場—第3の領域—を想定し、「体験の中間領域 (intermediate area of experience)」とよんだ。

最初乳児は自分の本能的緊張の意味やその解消の方法を思い描くことはできない。母親のほほ

完全な適応によって乳児は「自分の想像する能力に対応する外的現実があるのだ、という錯覚」をもつことができる。この体験が対象との安定した関係を作る上での基礎になる。しかし、乳児のほぼ完全な錯覚は徐々に無理なく解かれねばならない（脱錯覚）。乳児は乳房が自分の想像したものではなく、自分の意志とは独立してあるという現実をなんらかの形で受け入れることが求められる。また乳児が愛したい衝動を向けていたものと攻撃したい衝動を向けていた物とが同じ対象であることに気付く。脱錯覚の過程は内なる現実と外なる現実を関係づけることである。Winnicott (1953) が注目した移行対象は体験の中間領域で意味をもつ。

Winnicott (1971 a) は乳児が移行対象と関わることのできる場、そして広く体験の中間領域は‘母’と子の間に広がる信頼の場であると述べる（この際‘母’というのは子どもに対する母性的関わり一般とそれを行なう人物をさし、必ずしも実母とは限らないと筆者は考えている）。‘母’は子どもが錯覚するために対象をさしだし、そして徐々に脱錯覚する過程を助ける。また子どもが移行対象と関わることについて、それが主観的なものなのか客観的なものなのか問いかけることをせず、体験の中間領域で子どもが自分で意味を発見するまで待つ。体験の中間領域に関わることは必然的に関係のうえに成り立っている。

最近の乳幼児研究の成果は乳児が誕生後の最早期から対人的な場が開かれていることを示している。Stern (1985) は乳幼児と母親の相互交流の在り方を観察し、乳児が言葉以前に「自己感」を持っていること、「自己感」は乳児の体験や‘母’によって欲求にこたえられることによって生成発展することを示した。最早期の（とくに2ヵ月～7ヵ月ごろ）母子のやりとりのなかでその相互交流の体験の一般化された表象（R I G S, Representation of Interaction that have been Generalized）ができ、発動性、一貫性、情動性という乳児の自己-不変要素が統合され、また愛着対象の表象ができる。また7～9ヵ月ごろには独立した二人の間で起こる主観的交流「間主観性の共有」(Stern, 1985) が可能になる。彼は‘母’と子の中で生じる内的状態の伝えあいを「情動調律(affect attunement)」とよぶ。それは共有された情動状態がどんな性質のものか表現する行動で、「出来事を矯正し、行動の背後にあるものや共有された感情へ」焦点を向け、「内的状態の共有を交わし、知らせ合うのに不可欠な方法である」(Stern, 1985)。

Sternは行動に反映された感情状態を移し返すことが情動や自己感に対する認識を促すことを示したが、このことは一つ一つの体験とそれにとまなう情動状態が意味づけられるだけの問題ではないと思う。Dolto (1977) は育児相談の中で新生児が‘母’と共にあり、体験がことばによって名付けられ意味づけられることの必要性を強調する。例えばDolto (1977) は数ヶ月の乳児が泣くときに、語りかけながら苦しみに寄り添うことがその苦しみを人間らしいものにする、と述べる。「口に出して話されないものはすべて、(中略) 子どもと母親との関係のなかに組み込まれることがないのです」(Dolto, 1977)。

自己感覚を確かなものとしてもつにいたっていない幼い子供には、自分の内で起こる情動や見知らぬ世界との出会いを自分を脅かすものと体験することがたびたびある。Winnicott (1971 a) は体験の中間領域において照らし返しされることによって個人は「私は存在する」ということを体験し統合されると述べる。守りが保証され、体験が意味付けられ抱えられることにより子どもの体験は自己感覚のうちに統合されるのであろう。

2) 遊ぶことと自己感覚の発達

Winnicott (1971 a) は‘遊ぶこと’の治療的な働きについて触れている。「遊ぶことは一つの体験、しかも常に創造的体験なのであり、そして、生きることの基本的形式である時間-空間の連続体における体験である」。彼は遊びについて語る時、その内容よりは遊ぶという行為を重視し、とくにそれを「遊ぶこと (playing)」と記述している。

Freud, S. は1才半の子どもが糸巻きを投げることによって母親との分離に伴う不安を操作している例を報告している。Freud の知見について Winnicott (1941) は診察室に訪れた子どもたちの観察を通して記述している。彼は舌圧子を乳児 (主に5ヵ月から13ヵ月) に与え、乳児がそれを取り扱う様子について、乳児が①それに関わるかどうかためらい、②やおらそれをいじくり、心ゆくまでなめ回す③最後に、初めは偶然のようにそしてだんだんとわざとそれを床に落として乱暴に取りのぞく、という一連の過程を楽しむことを報告している。彼はこのプロセスを①対象と関わるかどうかの葛藤の段階②舌圧子を所有物として使用している段階③わざと対象がなくなる状況を作る段階、と意味づけている。Winnicott は乳児が舌圧子という具体物を用いながら、自分と対象との原初的な欲求に基づいた関わりや関わることに伴う不安をそこに映し出し、最後にはそれを捨てることができる (離すことができる) ことを確認する中で対象の不在を操作し償いを行なうという過程にいたることを示した。遊ぶことは脱錯覚という困難な課題にともなう不安を体験の中間領域において危険なく取り扱うこと助ける。

臨床の場でも日常の場でも子どもの好んでしている遊びを見ていると心理発達上の課題との関連が見えることが多い。Erikson (1950) は女の子が牛を積み木で囲って女性の保護的様式を表しその復元を象徴的に成し遂げた事例を報告している。Erikson (1950) は子どもの遊びを「ある事態の雛型を創造することによって経験を処理し、また実験し計画することによって現実を支配するという人間の能力の幼児的表現形式である」と述べる。子どもは自己感覚の発達のうえで必要な遊びや玩具を自ずと選び、遊ぶことによってその課題を取り扱う。

Vygotsky (1933) は幼稚園期の遊びに注目し、その意味生成作用にふれている。Vygotsky は、遊びは3才をすぎた子どもたちが願望を創造的に実現するところに生じるという。3才未満の子供の活動は場面に束縛されている。‘モノ’に伴う意味はその‘モノ’と切り離して扱うことがむつかしい。3才をすぎるとより子供の認識する対象活動が広がる。モノから意味を離して扱うことのできるようになる移行期に遊びは大きな役割を果たす。「遊びのなかではじめて、意味的世界と視覚的世界 (‘モノ’や場面に束縛された世界-筆者註) の分離が生じる」(Vygotsky, 1933)。Vygotsky は棒を用いた馬のり遊びの例を挙げている。彼によると子どもにとって馬という意味を現実の馬から切り離して扱うことは困難な課題である。棒にまたがって走り回り、馬に乗っていると宣言することによって、子どもは馬に乗ることを想像しそのように想像し行為している自分について認識する。この例は棒が現実の馬 (‘モノ’) と馬という意味 (考え) を分離するための支えになっている。「子どもは、‘モノ’から切り離された意味を操作しているわけだが、その意味は現実のモノを扱う現実的行為から切り離されていない」(Vygotsky, 1933)。

子どもの遊びをみていると、「～遊びをする」と意図していることは意外と少ない。一見意図がありそれを宣言していたとしても遊びは即興的で刻々と変化する。むしろ遊ぶ中で意味が生まれてくることが多いように思われる。Vygotsky (1933) は子どもは「遊び活動の動機を意識するこ

となく遊ぶ」という。彼はファンタジーの実現が遊びの動機になるという考え方に異を唱え、遊ぶことの結果ファンタジーが形をなし遊びに導いた動機を認識する、と主張する。

幼児が親のまねや絵本やテレビ番組の再現をしていることはしばしば見られるところである。とくに2才後半から3才のお誕生の頃に顕著に見られるが、たどたどしい言葉を当てはめて自分の見てきたことを語ることが多い。ある場面の再現や語りは、人に示すためもあるが、語りを鍵にして自分のなかに見た場面やその時の感情を呼び起こしているという面もあるように思われる。彼らは見たことを再現し、その語り口に自分を合わせていくことによって、身ごなし方やその物語にひかれた自分を意識する。この過程を経て自己感覚にそぐうふるまい方（‘自分らしい’ふるまい方）を身につけるのであろう。

Vygozky (1934) は子供が意味を獲得する過程について「最初は、共同活動の形式として発生し、そのあとでのみ、子供によって自分自身の精神活動の形式に移される。自分への言語は、最初は他人への社会的な言語機能が分化することで発生する。子供に外からもちこまれる漸次的社会化ではなく、子供の内面的社会性を基礎に発生する漸次的個性化が、子供の発達の大道なのである」と述べる。共同体や文化のなかに誕生しその意味を特に顧みることなく生きている子供が、意味を主体的に用いる過程がある。その発達の移行期に遊ぶことは大きな力をもつ。

Vygozkyは遊びを認識の発達のなかで位置付けようとした。精神分析など心理臨床の基礎となる考え方では、対象に対する無意識の欲望を取り扱う。両者の間では視点のおき方は異なるが共に‘遊ぶこと’によって自己感覚が形成されることを示している。幼い子どもは場面に束縛され‘母’の与えた意味を取り入れて生きている。‘遊ぶこと’は子どもが欲求による一連のプロセスを成し遂げ、言葉の意味を主体的に取り扱い、行為や感情を自分のこととして認識する過程を促す。‘遊ぶこと’は、子どもが体験を自分自身に照らし返し自己感覚のうちにまとめることを支えることが示唆された。

2. 描くことと自己感覚の発達

心理臨床の一技法にいわれる絵画療法がある。我々は来談者が描画をとおして自身気づかなかった自分を示し、癒される過程を見ることができる。臨床場面での描画を見るときその内容に目を奪われがちであるが、描くという行為が癒す力をもつ。中井 (1976) は絵画療法の特徴をまとめている。そこで①絵画療法は関与しながらの観察を容易にする、②絵画は示すことにすぐれた技法で描かれたものは否定されえない、③絵画療法は第三の対象を導入する。それは治療の場に出生の根をもち、そこでは解釈よりも対象関係が重要である。絵画療法は治療の場に体験の中間領域を作り出すのにすぐれた技法である。

臨床場面では描く行為の癒しの力、あるいは自己感覚を育てる上で働くことは実践的に確かめられている。しかし、臨床の仕事は事例を通して語られることが多く、治療関係の場にはいない者にとっては共有されにくい点も多い。描くことをめぐって生じていること、特に自己感覚が育つ中で描くことがどのように働くのか検討してみたいと思う。

1) 描くことは癒着した表現から発生する

Vygozky (1929～1930) は「書きコトバ」の発達について述べている。彼は書きコトバを身振

りの痕跡であるなぐりがきから発生しているものとしてとらえ、遊びの中で身振りから意味が分離し自立して記号だけを用いることができる過程の中で書く（描く）ことをとらえている。

3, 4才までの文字を使用する以前の段階（プレリテラシーの段階）の子どもの描くことをみると描くこととその他の表現形式と区別していない。茂呂（1988）はこのような子供の表現の特徴を「癒着した表現」という。さらにその特徴を①”書かれた”シンボルだけを取り出すことができない、②表出行為そのものが意味をもっておりそのシンボルは後から認められるにすぎない、③身振りや語りや描画などが相互に依存しながらそして相互に規定しあいながら交替しつつ出現する、としている。たとえば、安斎（1985）は点々を描きながらそのうちペタンペタンというリズムを見だし「おもちつきしている」と意味付けた2才9ヵ月の子供の例を報告している。「おそらくこの点は、リズムと一緒に経験した光景や味覚や嗅覚、暑さ寒さといった触角から興奮した体温や雰囲気までが溶け合った子供の身体が表出する視覚的断面であると考えられる」（安斎、1989）。

特にこのころの幼い子どもたちの描くことを見ていると、おしゃべりしながら描き、また描くことによっておしゃべりが展開する様子が見られる。例えば筆者の娘（2才4ヵ月）は同じような円を描き色々な意味付けをしている（図1）。それは、そのものに対応した特徴をもっているわけではなく、描きながら連想的に兄の名前や友達の名前をあてはめている。子供の描画を見るとき描かれた結果のみを見ては何が描かれたのかわからないが、描いている場を共にして語りをきいていると子供の感情が沸き上がってくるのが感じられる。子供の絵は語りの痕跡である。さらに描きながら語りは促される。

Vygotsky（1930）は「子どもの描画を子どもの独特なコトバとみなすべきだ」と述べている。そして、最初初めの時期の遊びでの表現が書きコトバにつながるという。たとえば子どもはいわ

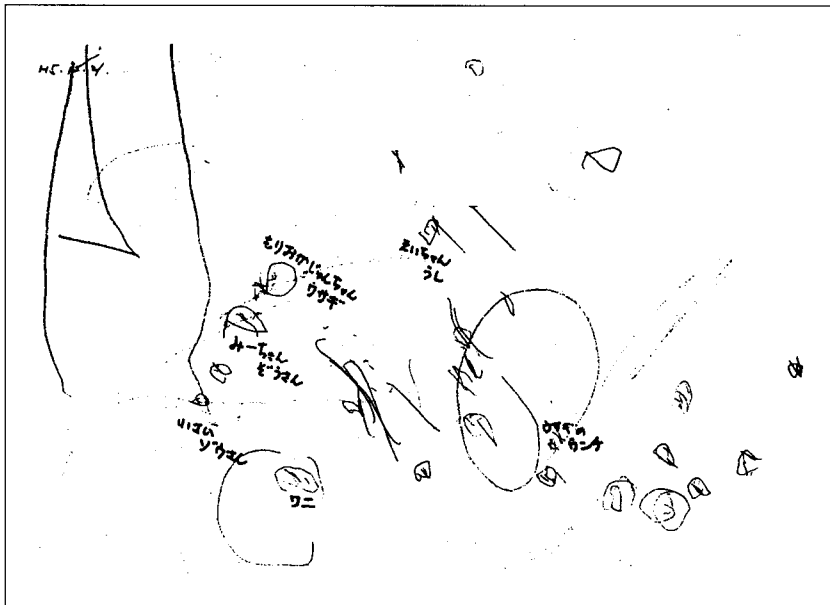


図1 筆者の娘Mの描画（2才9ヶ月9日）

ゆるレントゲン画を描く。これは子どもが描画によって語りたいことを図解したり展開したりすることのあらわれである。長坂・大場・渋谷(1978)はいわゆる概念画を取り上げ、子どもたちがお姫さまや家などのきまりきった図式画を用いて子どもなりの世界を展開する様子を報告している。そして概念画をむしろ象形文字に近いものとしてとらえ直そうと試みる。Vygozky(1930)は「描画は話し言葉を基礎とする図解コトバである」と述べる。かなり後期の段階になっても、子どもの描画は語りと相互に絡み合って発達する。

2) 描くことと自己感覚の生成

先に遊ぶことによって意味の生成過程がみられるのではないかと述べた。描くこと(書くこと)にもこのような意味の生成される過程を見ることができるのだろうか。

茂呂(1988)は‘意味’にはセンス(sense)とミーニング(meaning)の二種類があると指摘する。彼はセンスは、‘癒着した表現系’に近いものであり、対話等のように場面に規定されており、「対象およびシンボルから引き起こされる何かというよりも、その対象やシンボルに別のシンボルを利用し、表現活動によって応えること」と述べる。それに対し、ミーニングは語義といったものに近く、文脈や場を越えて同一である。Vygozky(1934)は、センスすなわち「意味」を「その単語によって我々の意識のなかに発生する心理学的事実の全体である」と述べる。筆者が本稿で扱ってきた‘意味’はこのセンスの方に近いものといえよう。

茂呂(1988)は、さまざまな作文の例を取り上げている。文字表現をもたない人たちや小学生が作文を綴ることによって『ものが思えるようになった』、すなわち書くことによって初めて自分の考えていたことを回収する過程が生じ自分自身を認識し表現できるようになった例を示している。これは書くことによって‘私’と‘私を見る私’が分裂し、さまざまな語り口が重ねあわせられるためではないかと示唆している。書くことにおいて内的な意図や表現と外的にされた文字表現とのずれを比較し調整するという調整—モニタリング過程が見られると考えられているが(安西・内田, 1981), 茂呂はこれに疑問を示し、書くことには‘わかったことを書く’だけでなく‘書いてからわかる’という面があることを示唆している。

文を綴ることのできない子ども、あるいはまだ自分の語り口を十分に形成できていない子どもの描くことにも上記の作文の事例のような自己発見の課程を見ることができる。

津守(1987)は娘の成長の記録から興味深い例を示している。彼の娘Aは2才の頃、大人にはよくわからない理由で泣きわめくことが多かったという。津守によると、その時のAは何かわけのわからないものに迫られて自分でもどうしようもない混乱の状態に陥っていた。しかし2才9ヵ月の頃より母親に助けられてAは恐さの源を言葉で意味付けることができるようになり、それに伴い一連の描画を行なった。それは最初もつれた糸玉のようなものだったのが(2才9ヵ月)、糸玉がほどけて分散し(2才10ヵ月前)、幾重にも重なった渦巻ききの中央に点がいくつも描かれた‘中心のある渦巻き’が描かれた(2才11ヵ月)(図2-1~3)。ちょうどその頃、Aには大きくなったという自覚が見え初め、わけもなく泣くことが減ったということである。Aはその後自分について不確かになるとき、中心のある渦巻ききのテーマを描いたという。これはわけのわからない外界との関わりが意味付けられる過程と連動して描画がなされた例である。

山上(1994)は自閉症児の療育に関わり彼らの身体像の回復の過程を描画の発達と共に跡づけ

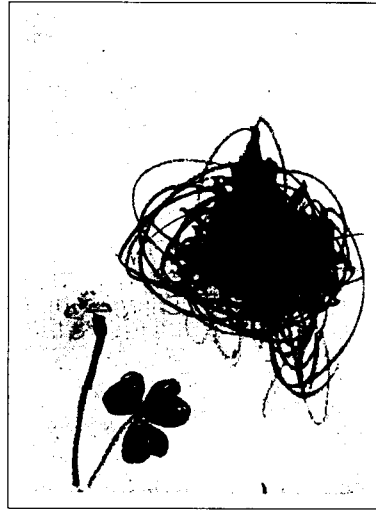


図2-1 「もつれた毛糸玉」
(2才9ヶ月0日)



図2-2 「毛糸がほどける」
(2才9ヶ月27日)

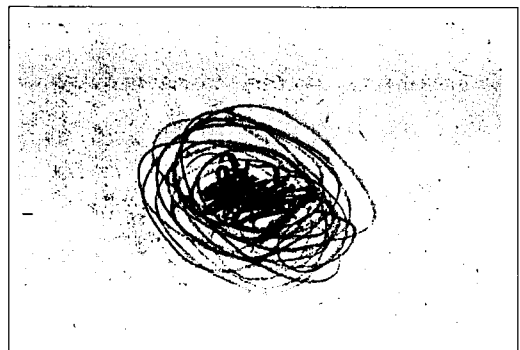


図2-3 「中心のある渦巻」
(2才11ヶ月)

図2 津守の娘Aの描画 (津守 1987 より転載)

ている。自閉症の子どもは身体像の獲得がなされておらず、そのため自らの行為さえもその身体において、自分のものとして受けとめえない状態にあるといわれる (伊藤, 1984)。治療においては十分な守りと治療者の積極的な照らし返しに支えられて身体像を取り戻す過程が見られる。それは色々な感情体験を自分のものとして引き受けることでもあり、例えば〈泣く存在〉だった乳児が〈泣いていることを感じる存在〉へと変わるようなものである。山上 (1994) は自閉症の子どもたちが象徴機能を獲得し自我意識が明確になる頃に Kellogg (1969) の分類によるマンダラ、アグレゲイト、太陽などの中心のイメージを示す描画が熱心になされることに注目し、「中心をもつ図形様の描画は、ある種の統合を達成した心の中から浮かび上がってくるイメージと考えられる」と述べる。

臨床の場面で描くことによって意味が生まれる過程を利用した技法としてスキグル法を挙げることができる。Winnicott (1971 b) はスキグル法を用いた臨床例を示しているが、なぐりがき—投影—絵画完成のプロセスを通して来談者の抱えている問題や訴えが表現されている。表現されたものは意図して描かれたわけではなく、内的な促しに従った結果得られたものであろう。来談者—治療者ともにスキグルを通して改めて自分の欲求について発見することも多い。

発達の変換期に混沌から整理—統合の方向を示唆する描画が描かれることは我々の臨床の現場、また子どもの育ちの現場でよく体験することである。この時描くことによって混沌から抜けることができる、と印象を受けることが多い。これは自己感覚が統合され自我意識がでてきたから統合のイメージがあらわれたとも、統合のイメージを描くことによって自己感覚がより鮮明になったともいうことができるように思われる。

先に遊ぶことによって‘母’から与えられ身につけていた意味づけが対象化され自分のものとして照らし返される過程が生じ、それが幼い子供の自己感覚の発達を促すのではないだろうか。問題提起した。描くこと（書くこと）にもその過程を見ることができよう。すなわち描くことによって、自分の体験の照らし返しが生じ、体験が意味付けられ自分を語る事が可能になるのではないだろうか。

3) ‘形’のはたらき

山上や津守の例は、あるテーマとなる‘形’（フォルム）を獲得しそれを用いることで子供の自己についての認識が促されるという可能性を示唆する。

筆者は幼稚園の年少組（入園当時3才0ヵ月から3才11ヵ月）の自由描画を縦断的に観察している。このころの描画はさまざまな‘形’の集まりであることが多い。現在のところ予備調査段階ではあるが、子どもたちが‘何かを描く’こと以上にそのような‘形’を描くことそのものに意味があるように見える（たとえば図3）。それは、集中、中心、交差、外へ手を延ばすなどの

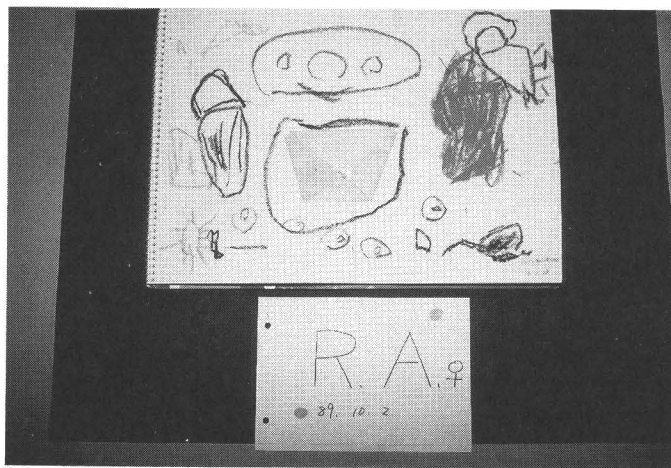


図3 幼稚園年少組女兒の描画（4才3ヶ月26日）
折紙でコップを作り、その周りに描いたもの

形を記すことに見受けられた。‘形’は大雑把に見れば、なぐりがきの集中→輪郭の出現→輪郭のみ描かれる→輪郭を基盤に中心や外に向けた方向性が探られる→ピクチャや文字、という変化の方向性を見せるようである。特に筆者は描画の発達する筋道よりも、この流れの背景にある子供の心の営みに注目したいと思う。内的なエネルギーを収める輪郭そして‘形’を発見し、その‘形’をいくつも書き込むことが表現の可能性が開くように見える。鬼丸（1981）、長坂（1981）はなぐりがきの連続運動が止められ輪郭の意識が生まれるときに円が発生し、子供がそれを基盤にして表現を発展させることを報告している。先の山上や津守などの例と合わせてみると、子供は‘形’をシンボルとして自己感覚を統合するのではないだろうか。

茂呂（1988）は「描くということは、何らかの“もの”を作りながら、それを助けとして、何かの別の現実を指し示すことである」と述べ、「シンボルを構成したのちに、あるいはシンボルを構成するさなかに、有意性を得るという面がある」と指摘する。茂呂は書くことを身ごなしや語り口なども含むシンボルを自分に向けることによって固有の声を作り上げる活動と位置づけている。身についた（無意識的に用いている）意味を一度切り離して対象化し自分のものとして再発見する過程は具体的可視的な‘形’を用いることを必要とするのではないだろうか。このことは自分の語りを確かなものとしていない幼い子どもたちに特に顕著に見ることができよう。‘形’は先に遊びのところで取り扱った馬遊びに用いられる棒や子供のものまねのモデルとなる物語やテレビ番組などに近い働きをするものと考えられる。元来‘形’は癒着した表現系の中から生じる。ある‘形’が意味あるものとして何度も描かれることは‘形’の発生に伴う体験を呼び起こす。‘形’を描くことは子供がそこに自己の体験を重ね合わせ、体験のみを取りあげ認識することを促すのであろう。

さらに‘形’の働きについて考える手がかりとして箱庭療法で取り扱われる象徴の役割について触れてみよう。箱庭療法は来談者の自己の顕在化の過程を援助するための一技法である。来談者は「自由であると同時に保護された空間」（Kalff, 1966）において遊び、無意識の過程に触れそれを意識に上らせて体験する。Kalff（1966）は変容は制限ある場において生じるといい、河合（1985）は箱庭は無意識の過程にいたる「通路」となると述べる。無意識の過程は象徴化された具体物を通して体験される。箱庭療法で作られる‘作品’は無意識の過程を反映し、箱庭という制限のなかに示されたイメージである。岡田（1984）は、箱庭において体験されるイメージの特徴として、具象性、集約性、直接性、という河合（1969）の指摘に加えて、力動性を強調している。箱庭療法の過程は、砂や玩具という非常に具体的なものの操作を通してそれに伴う無意識の動きを来談者—治療者ともに体験する（味わう）過程である。

箱庭療法の過程は描画の過程にも見ることができよう。描画が治療や自己感覚の発達において意味をもつのは、描くことによって無意識過程にある自己治癒力を意識の過程において体験することを可能にするためではないだろうか。特に3、4才までの幼い子供は体験を自己感覚のうちに意味づけるだけの身体像を十分に発達させていない。‘形’を描くことが子どもの意識と無意識をつなぐ通路となり、もしそのような‘形’をもたなかったらとらえどころのない自己感覚をまとめる核になるのではないだろうか。

茂呂（1988）はなぜ人は書くのかという問いをくくるにあたって、書くことによって「他者の

さまざまな語り口と身ごなしを引用し重ね合わせながら、自分であることの探求を続け、“声”を発見する」と記述している。描こうとすることで‘私’は‘内的な私’と‘外に表れた私’とに分裂し、内的な欲求が流れるままになることが止められ、それが‘私’に照らし返される。また描かれたものは意味を帯びて自律し、無意識のうちにあって意味付けられていない体験に形を与え、子供が自覚のうちに体験することを助ける。描くことは体験を自己感覚にまとめてゆき、子供が固有の語りや意味づけを身につける時に大切な役割をもつ。

4) 描くことにおける受け取り手の存在

最後に描くことにおいて受け取り手である他者の存在について触れねばならない。絵画療法は、関与しながらの観察を可能にし、そこに生じる治療的な力を生かした技法である。中井(1976)は臨床場面でなされた描画が患者—治療者のどちらにも属するものではなく、「強いていえば、治療の場に属し、それに出生の根をもつ」ものと位置づけている。

Winnicott (1971) や村瀬 (1993) のスキグルの事例を見ていると治療者の繊細な感受性と来談者の存在に対する洞察とほどよい遊び心の微妙なバランスの上で治療的な働きが見られることがよくわかり、感嘆させられる。村瀬 (1993) はスキグルの場で生じる波長あわせについて事例をあげて解説し、来談者の描線を受け取ることによって治療者の内面で生じる感覚をしっかりとらえて来談者に返すことが治療を促進することを指摘している。スキグルははじめ絵画療法は、治療者が描画を通して来談者自身言うに言われぬメッセージを治療者がどのように受け取ったのか自覚することによってはじめて治療的な働きをもつ。

描画は固有の意味を探る場であるが、その過程を意義深いものとして抱える他人からの照らし返しを前提とする。意味は他者との対話交流のうちに見いだされることを忘れてはならない。

参考文献

- ・安斎千鶴子 1985 子供の絵はなぜ面白いのか. 講談社
- ・安斎千鶴子 1989 造形表現の育ち. 発達, 37, No.10, 32-43
- ・安西祐一郎・内田伸子 1981 子供はいかに作文を書くか?. 教育心理学研究, 29, 323-332
- ・Dolto, F. 1977 子どもが登場するとき. 村上光彦訳 1982 みすず書房
- ・Erikson, E. H. 1950 幼児期と社会. 仁科弥生訳 1977 みすず書房
- ・河合隼雄, 1969 箱庭療法入門. 誠信書房
- ・河合隼雄, 1985 箱庭療法と転移. 箱庭療法研究2, 誠信書房
- ・Kalff, M. D. 1966 Sandspiel, Rascher Verlag, Zurich
- ・Kellogg, R., 1969 Analyzing Children's Art by Rhoda Kellogg. National Press Books, California
- ・伊藤良子 1984 自閉症児の〈見ること〉の意味 身体イメージ獲得による象徴形成に向けて. 心理臨床学研究, 1, 44-56
- ・森岡理恵子 1988 Squiggle Game において生じる治療的場所. 京都大学教育学部修士論文
- ・森岡理恵子 1994 最早期の描画における円の発生の意味—象徴の芽生え. 山中康裕・岡田康伸編 身体像とこころの癒し. 岩崎学術出版社 165-172
- ・茂呂雄二 1988 なぜ人は書くのか. 東京大学出版会
- ・村瀬嘉代子 1993 スキグルの治療促進の内面過程. 臨床描画研究8, 35-50
- ・長坂陽雄・大場幸夫・渋谷憲一 1978 概念画の発達機序に関する教育心理学的研究. 大妻女子大学家政学部紀要, 14, 99-144
- ・長坂陽雄 1981 幼児画の発達過程における「頭足人」の位置づけについて. 大妻女子大学家政学

森岡：自己感覚の発達における描くことのはたらき

- 部紀要,17, 91-109
- ・中井久夫 1970 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって作られた知見について—。芸術療法,2, 77-89
 - ・中井久夫 1976 芸術療法の有益性と要注意点。芸術療法,7, 55-61
 - ・中井久夫 1977 ウニコットの Squiggle 法。芸術療法,8, 129-130
 - ・中井久夫 1982 相互限界吟味法を加味した Squiggle 法。芸術療法,13, 17-21
 - ・岡田康伸 1984 箱庭療法の基礎。誠信書房
 - ・鬼丸吉弘 1981 児童画のロゴス—身体性と視覚—。頸草書房
 - ・津守真 1987 子供の世界をどうみるか—行為とその意味—。NHKブックス
 - ・Stern, D. N. 1985 The Interpersonal World of the Infant:A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. Basic Books, Inc, New York (小此木啓吾・丸田俊彦監訳 1989 乳児の対人世界。岩崎学術出版社)
 - ・Vygozky, L. S. 1929-30 書きコトバの前史。柴田義松・森岡修一訳 1975 子どもの知的発達と教授。明治図書
 - ・Vygozky, L. S. 1933 子どもの心理発達における遊びとその役割。神谷栄司訳 1989 ごっこ遊びの世界。法政出版
 - ・Vygozky, L. S. 1934 柴田義松訳 1975 思考と言語。明治図書
 - ・Winnicott, D. W. 1941 The Observation of Infants in a Set Situation. International J. of Psychoanalysis, 22
 - ・Winnicott, D. W. 1953 Transitional Object and Transitional Phenomena. International J. of Psychoanalysis, 34,
 - ・Winnicott, D. W. 1971 a Playing and Reality. Tavistock Publications Ltd. London (橋本雅雄訳 1979 遊ぶことと現実。岩崎学術出版社)
 - ・Winnicott, D. W. 1971b Therapeutic Consultations in Child Psychiatry. The Hogarth Press, London (橋本雅雄監訳 1987 子どもの治療相談。岩崎学術出版社)
 - ・山上雅子 1994 自閉症児の治療過程における中心の表象について。心理臨床学研究, 11, 220-231